

令和7年度 豊田市大学・高専提案研究報告書

I. 提案大学

日本赤十字豊田看護大学

II. 提案研究テーマ

豊田市のブラジル人学校に通う児童・生徒の健康維持・増進を支える【地域連携出張型学校保健室】支援モデルの構築

III. 研究の実施状況

日本赤十字豊田看護大学研究倫理委員会の承認後、EAS ブラジル人学校に通う中高生、教職員を対象に実施した（承認番号 2522）。

[第1段階]

ブラジル人学校における中高生の生活習慣の実態と教員が認識する生徒の健康課題を明らかにし、生徒の健康を支える支援モデル構築のための示唆を得る目的で、中高生を対象としたアンケート調査、教職員を対象としたグループインタビュー調査を実施した。

1. 対象：

中学生（日本の小学6年生～中学3年生相当）および高校生（以下、生徒）計124人、学校長を含む教員4人であった。

2. 方法：

生徒には、生活習慣や悩みを尋ねる自記式質問紙調査を実施し記述統計を行った。教員には、まとめた生徒の質問紙調査結果を示し、通訳を介した半構造化グループインタビューを行い、教員が認識する生徒の健康課題について質的帰納的に分析した。

3. 結果：

生徒の質問紙調査結果では、有効回答率は100%であった。自身を健康と認識する生徒は97.2%であったが、平日の平均睡眠時間が8時間未満の回答は60.0%で、睡眠不足による日常生活への支障を感じないと回答したのは70.7%であった。朝食を欠食していたのは63.7%で、インターネットを一日6時間以上利用する生徒は49.6%であった。悩みやストレスがあると回答したのは56.0%であった。教員のインタビュー調査では、30コードが抽出され、9サブカテゴリ、4カテゴリが生成された。教員は、【睡眠不足が日常生活に与える影響の認識不足】、【不適切な朝食習慣】、【アイデンティティ形成期における葛藤と不安】、【未熟なストレスコーピング】を生徒の健康課題として認識していた。

[第2段階]

第1段階で明らかにした教員が認識する中高生の健康課題（睡眠不足が日常生活に与える影響の認識不足、不適切な朝食習慣など）を踏まえ、中高生を対象とした健康講座を実施し、その効果を評価した。

1. 対象：

中学生（日本の小学6年生～中学3年生相当）および高校生（以下、生徒）、計96人で

あった。

2. 方法：

生徒を対象に、睡眠時間の確保や朝食摂取に関する基本的な内容で、30分程度の健康講座（以下、講座）を実施した。その後に講座に関する自記式質問紙調査を行い、得られた結果を単純集計し、生徒の健康に対する意識の変化などから評価した。

3. 結果：

94人から回答が得られ（回収率97.9%）、欠損値を除いた92人の分析を行った（有効回答率97.9%）。講座について「満足した・まあまあ満足した」は89.2%、内容を「理解した・まあまあ理解した」は97.8%であった。「健康について意識が変わった」は47.8%であり、そのうち、講座の聴講後、「何かを始めたい」と答えた生徒は38.6%であった。行動の具体的内容は「毎日朝食を食べる」「携帯電話の使用を減らす」「睡眠・起床のスケジュールを整える」などであった。また、希望する講座は、「家族へのアドバイス」「女性の健康に関すること」などであった。

IV. 本研究のまとめと今後の予定

今回は、豊田市の協力を得て、研究資料のポルトガル語翻訳を適時に実施することができ、研究を円滑に遂行することができた。その結果、生徒たちの現状やニーズ、ならびに生徒たちと教職員との意識の乖離が明らかとなった。これにより、今後、EAS校の生徒たちをはじめ、豊田市に在住する外国人生徒たちの健康の維持・増進に向けて、本学の専門性を生かした地域貢献活動の方向性が示唆された。

本研究成果は、令和8年6月に開催される日本赤十字看護学会において発表予定である（添付資料：学会発表抄録）。また、令和8年度には、EAS校の生徒たちを対象とした健康講座を継続的に実施するとともに、保護者を対象とした健康増進支援も計画している。